

問題 D

問 1. 摂食嚥下訓練で誤っているものを選びなさい

1. のどのアイスマッサージは咽頭のみ刺激を与える訓練である
2. ゼリーを訓練で使用する場合は付着性が少ないまとまった形態のものを使用する。
3. 直接訓練開始基準として改訂水飲みテストで嚥下反射をみとめる必要がある
4. 直接訓練を行う場合は、SpO₂の測定や吸引の準備などリスクの管理に留意しなければならない。

問 2. 嚥下訓練開始の条件で誤っているものを選びなさい

1. むせを訴えなければ開始する
2. 意識が清明である
3. 意志の疎通が図れる
4. 口から食べたいという意欲がある
5. 自力で空咳ができる

問 3. リハビリテーション評価で誤っている組み合わせを選びなさい

1. MNA-SF --- 栄養状態評価
2. MMT --- 筋力評価
3. FIM --- ADL評価
4. GDS --- 意識レベル評価
5. MMSE --- 認知機能評価

問 4. 栄養摂取が出来ている低栄養状態患者に推奨されない活動を選びなさい

1. 更衣・整容・歩行(54m/分以内)
2. 静かに立つ
3. レジスタンストレーニング(軽・中負荷)
4. 編み物・手芸・入浴(座位)
5. 安静臥床

問 5. 各嚥下テストについて誤っているものを選びなさい

1. 改訂水飲みテストは3mlの冷水を口腔底に注ぎ、嚥下させる
2. 100ml水飲みテストは、改訂水飲みテスト、食物テストより感度が良い
3. 食物テストはティースプーン1杯(3~4g)のプリンを口腔底に置き、嚥下させる
4. 反復唾液嚥下テスト、100ml水のみテストは座位で行う
5. 反復唾液嚥下テストの評価で、30秒間に2回以下の場合は嚥下開始困難が疑われる

問題 D

問 6. 嚥下障害患者のリハビリテーションで「基礎的で大事なこと」について、誤っているものを選びなさい

1. 評価や見立てをしっかりとすること
2. 病態に合った訓練法を選択すること
3. 他職種との連携を図り、その役割分担を行うこと
4. 呼吸関連の機能に関しては、ある程度嚥下訓練が進んでから着目すること
5. 機能変化の原則をおさえること

問 7. 頸部可動域訓練で誤っているものを選びなさい

1. 患者自身ができる場合は患者自身で頸部の屈曲、伸展、回旋、側屈を行う
2. 頸部の拘縮予防および改善と頸部周囲筋のリラクゼーションを目的とする
3. 最終域まで動かない、自動できない場合は、他動で少し痛みがある範囲まで動かす
4. 頸椎症など頸椎疾患患者へは控える
5. 臥位または座位の体幹が安定した姿勢で行う

問 8. K-point刺激法で誤っているものを選びなさい

1. 絞扼反射が強い場合には注意が必要である
2. 嚥下反射の惹起性を改善させ、喉頭挙上運動の速度及び距離を改善させる
3. 冷水で冷やした8～10F程度のフィーディングチューブを使用する
4. 舌の送り込み運動、咽頭期嚥下運動の協調性を改善させる効果も期待できる
5. 誤嚥のリスクが高く直接訓練が困難な患者も対象となる

問 9. 認知症患者の嚥下訓練として適切でないのはどれか選びなさい

- a. 歌唱
- b. 摂食類似刺激
- c. 頸部可動域拡大訓練
- d. メンデルゾーン法
- e. バイオフィードバック法

1. a、b
2. a、e
3. b、c
4. c、d
5. d、e

問題 D

問 10. 誤嚥を防ぐ仕組みでないのはどれか選りなさい

1. 喉頭蓋の後傾
2. 仮声帯の内転
3. 声帯の内転
4. 輪状咽頭筋の収縮
5. 喉頭挙上